

R5 南台小学校 個人の学び 記録

研究主題

児童主体の学びの実現 ～子供の学びから授業をデザインする～



□ラウンドスタディは南台小学校で初めて経験した。グループに分かれての話し合いは、意見や感想が出しやすかった。また、グループを回って振り返りをする事で、多くの意見を知り、交流することができた。ラウンドスタディにより、主体的に意見を出すことや意見を聞くことができた。全部の先生が授業をしたことは、研究主題にどのように迫るのかのいろいろな視点、考え方で見る事ができた。教科も偏らず良かった。自分の授業では、国語の「じどうしゃくらべ」を5年生の担任に協力していただき、社会の学習の「自動車」とコラボして行った。1年生は、説明文の学習で学んだことを生かして、5年生が考えた自動車の説明をする文を書いた。児童は、縦割り活動などで身近に感じている5年生の考えた「車」の説明を書くことに、意欲をもつことができた。さらに、たくさんの「車」の中から自分のおすすめの車を選ぶことも、児童に意欲をもたせることができた。出来上がった説明の文を、5年生に見てもらえるということで、最後までモチベーションが保たれ、児童は主体的に取り組めた。5年の先生方にはビデオ撮りなどでお手数をかけましたが、初めての試みができありがとうございました。

□今年度は、グループに分かれて全員が授業を公開するシステムのおかげで、他の方の授業をたくさん見学することができました。学年や教科に寄らないことで、多様な学びがありました。6年生の道徳では、児童の発言を教員が取りまとめて板書していたり、5年生の外国語の学習では、児童に応じてプリントの様式を変えていたり、自分もぜひ取り入れたいと思うことが多かったです。

自分自身の授業公開（1年生の音楽）では、児童が主体的に学ぶためには、授業に安心して取り組める環境を作ることを重点に置いて計画をしました。そのために、音楽作りのルールを単純で明確にしたり、段階的に音楽を作ったりしていきました。私は、音楽を作ったらすぐ演奏するものだと思っていました。しかし、グループでの振り返りで、練習の時間をとり、そこで上達したり、いくつか試したりすることも、児童の主体的な学びにつながるということを学びました。これまでは、音楽の授業づくりに対して、じっくりと考える機会がなかったので、専科の先生からたくさんのアイデアをいただけて、ありがたかったです。

校内研究授業をさせていただいたことで、多くの学びを得ることができた。また、多くの先生方に支えていただく中で、それぞれの先生方の授業づくりに対する思いやこだわりを学ぶことができた。研究授業をさせていただいたお陰で、「児童主体の学び」とはどのような学びかを深く考えることができた。私が考える主体的な児童の姿とは、①興味関心のあることを自主的に学ぶこと、②進んで授業に参加することの2つである。どちらにも共通する背景として、面白い、楽しいと思って活動することがいえると思う。今回の研究授業では、「当たり探しゲーム」で学習に興味と意欲を高め、自分の考えに根拠や自信をもたせるために、友達の考えを聞きたくなるような「当たり探しゲーム」や「当たりはずれ分けゲーム」という活動を設定した。実際の授業では、ゲームに取り組む中で意欲的に学習する姿が見られた。授業後、「分かった」「できた」と子供が言う場面を増やすと主体的に学ぶようになるのではないかと感じた。そのために、常に子供たちの興味・関心を高めるための工夫を取り入れること、ゴールの姿を見据えた授業展開にすることを意識して指導したい。

全員授業では、子供同士が対話し学んでいく場面を多く見た。友達と意見を交換することで新たな気づきが生まれたり、自分の考えに自信をもったりすることができると分かった。友達と学習することのよさを改めて実感できた。また、同グループの沖先生と山口裕子先生の実践から、異学年・異教科での交流ができると分かった。相手意識が生まれ、より一層学習意欲が高まっているように感じた。さらに、学習意欲だけでなく、思いやりや気配りなども自然と学ぶことのできる取り組みであったと思う。今後機会があれば、ぜひ取り組んでみたい。

着任してすぐに研究授業の声をかけていただき、大変感謝しています。学びの多い校内研究でした。多くの先生方に支えていただきありがとうございました。

今回全員授業という形で、自分も授業をすること、同じグループの先生の授業も見に行くこと、そのどちらもが出来たので「子どもの視点に立つ」ことを何度も体験した。自分が授業をしていると、頭では「子どもの視点で考えよう」と思っている、つい教えたことが先行してしまう。そのために、理解のゆっくりな子やこだわりのある子の、つまずきや考えを見逃してしまい結局ねらいに到達していなかったということが後から分かることもあった。今回、他の先生方の授業を見に行く機会があったことで、子どものつまずくところや興味をもつところを、子どもと同じ視点で見て感じる事が出来た。高学年では、プリントを選択できるようにしていたり、ノートの使い方を固定せず、自分の考えを自由に書けるようにしていたり、様々な工夫に「なるほど」と思われた。同じ低学年の1年生の授業では、全員が安心して取り組めるような明確で分かりやすいルールが設定されており、自分の授業でもすぐに取り入れようと思った。

また、校内研の中でもお話があったように、子どもの姿を通していただく授業の振り返りは、「次はこうしよう。」「今度はこんなことをしてみよう。」という授業づくりの意欲につながった。他の先生方の授業を見た後に自分が伝える際も、事実として伝えることになるため、意見がしやすかった。今後授業について意見を伝える際にも同じ伝え方をしていきたい。

自分の授業では、国語の「話す・聞く」の単元を扱った。低学年にとって初めての国語の話し合いの学習であるため、どのように進めるべきか迷った単元でもある。しかし参観した1年生の授業で「明確なルールがあると分かりやすい」ということを学んでいたため、意識すべきことを端的に示し、話し合い活動に取り組ませることが出来た。また、学年の先生方にもご協力いただき、事前に話し合いの良い例と悪い例を比較させてから活動に入ったことで、児童の意欲も高めることが出来た。今回の校内研究は、一つの単元に時間をかけて教材研究したり、周囲の先生方と意見を交流したり、学びの多い期間だったと感じる。

子どもが「やってみたい!」「知りたい!」と思える種をたくさんばら撒く教師であるよう、他校の研修や研究にも積極的に参加し、自ら学ぶ姿勢を大切にしていこう。

□子どもが気付いた課題や工夫を共有して、教師が課題や工夫を整理して展開することが大切だということを学びました。

児童主体での学びで、子どもが思いついたことや工夫のどこを全体で共有し価値付けしていくか、授業を展開していく中で、まだまだ力不足であることを痛感しました。「上手にできている」「ちゃんとしている」から称賛するのではなく、児童が考えた意見や工夫の中に、学びが広がりそうなよさを見付けて全体で共有したり称賛したりしていきたい。自分自身で教科ごとの専門性を高め、学びを広げるポイントや子どもが考えた工夫をどんどん発展させていけるように、今回の研究で周りの先生たちの経験やアドバイス、授業の進め方を取り入れて授業をデザインしていきたいと思います。

□研究主題「児童主体の学びの実現～子供の学びから授業をデザインする～」

【研究の振り返り】

・主体的な児童の学びについて

⇒自己選択できる・自己決定することが主体的な学びにつながるということを感じることができた。ただ自分で考えなさいではなく、ある程度の枠組みの中で自己選択、自己決定を行うことで、その中から自分たちなりに工夫したり考えたりすることで、主体的に学ぶ児童の姿につながると考えた。

・教師の主体的な学び

⇒ラウンドステディの協議会の方法は初めてだったので、色々な方と交流し、それを共有することで、考えを深めたり改めて考えたりすることができた。また、色々な職層、経験年数の方とグループを組むことで、自分では気付かないことに気付くことができた。全員授業の期間が設けられたので、他の先生方の授業を気兼ねなく見に行けたことは、主体的な学びにつながったと思う。指導案を全員に配ってくださることで、自分のグループでなくても見に行くきっかけになったのがよかった。

・これからの自身の授業デザインにどういかしていくか

⇒「～したい」という「たい」が生まれる授業にしていきたいと常々考えているので、自己選択、自己決定ができる場の設定や課題の設定を意識していけるようにしていきたい。全員授業や研究授業の参観で感じたことや気付いたことを少しでも反映できるように授業にいかしていきたい。

□これまでのゲームの学習では、教師が意図して「はじめのルール」を詳しく提示し単元をスタートしてきた。しかし、今回の「ベースボール型ゲーム」の授業では、「アウトのやり方」と「打つ方法」、「打つ物の処理の仕方」の3つのみを「はじめのルール」として児童に提示し、その他に必要なルールがあれば、対戦するチーム同士でゲーム前に相談して決めていくという方法で授業を展開した。

この実践を通して、「はじめのルール」は極力シンプルなもの提示すればよいことが分かった。それは、ゲームをする際に思考・判断・表現の活動の時間を確保すれば、3年生までに身に付けた、資質・能力を生かして話し合い、単元の中盤には教師が意図してつくる「はじめのルール」に近づいていったからだ。また、ルールをシンプルにすることで、運動が苦手な児童もやり方に戸惑うことなくスムーズにゲームを始めることができた。

今年度の振り返りから来年度を見据えて（２０２２年度の振り返り）

１０年ぶりの担任業務を通して痛感したことは、担任と算数担当では時間の流れ、子どもを見るポイントが全く違うということです。まず、業務の量と質の違い、「自分は以前よく担任業務をしていたなあ」と思いました。朝、教室で児童を迎え入れてから、下校するまで、各教科等の授業をはじめとする業務はもとより、「子どもたちを預かっている」という意識がずっとあります。これは、算数担当の間はずっと忘れていた感覚でした。「ああ、これが担任をすることなんだなあ」と１０年ぶりに思い出しました。

また、算数以外の授業も１０年ぶりでした。算数以外については、教科書を見て「浦島太郎」の気分でした。石坂さんに実際に授業を見せてもらったり、しつこく聞きに行ったりして、何とかついていきました。だんだんと「勘」が戻ってきてからは、自分なりに授業を組み立てていけるようになってきたように思いますが、１０年間のブランクはかなり大きいものでした。

そして、変化もありました。「おそらく１０年前の自分は、こういう授業展開は絶対にしなかっただろうなあ、きっと既定路線で『流した』だろうなあ」と思う瞬間が授業中にありました。いわゆる授業の「見た目」をかなり気にしていた１０年前（それ以前を含めて）の自分、「子どもが何かしらを内発的に学ぶことが第一」と考えるようになった最近の自分、この違いが授業のスタイルの変化の理由と自己分析しています。（そう考えると授業の「見た目」は１０年前のほうが「スマート」だったかもしれません）。

今年度は、算数部に所属し、算数を中心に校内研究を進めていく予定でしたが、担任業務につくこととなり、算数の授業研究が十分にできなかったことは真摯に反省しなければならないと思っています。また、担任業務を通して、コロナ禍における、共同的な学びの機会の減少を大変憂慮しました。ペア学習、グループ学習、交流学习など、その重要性が、できなくなったことでさらに認識できた気がします。

そこで、来年度は、教科領域等を超えて、共同的な学びについて、自分なりの課題意識をもって追究出来たらと考えています。また、内容としては、南台小学校の豊かな自然環境を生かした学習、読書活動にかかわる学習、書くことにかかわる学習などが念頭にあります。まずは、自分自身が、校内研究に対して「主体的・対話的」に臨み、「深く学」べるように、ということが次年度の自分の目標です。

今年度は、かなり厚かましく、自分のこれまでの授業研究・研究授業・教師の学びについて、具体的な方法を南台の先生方に押し売りしてしまいました。それを受け入れてくださった皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。また、そういう新しいものを受け入れよう、新しいものにチャレンジしてみよう、という姿勢・柔軟性が大変素晴らしいものと思いました。私も、これまでものを一度捨てて（学習棄却・nulearn）、南台小学校ならではの、南台小学校の皆さんとともに歩んだからこそ作ることができる校内研究を目指して、学びを継続していきたいと思っています。

□学校の役割とは（２０２３年度の振り返り）

昨年度（２０２２年度）の自分の振り返りを読み、今年度（２０２３年度）を振り返ってみました。今年度、私は、昨年度末に想定していた課題とは別な課題に直面しました。それは、いわゆる「課題非従事行動」にどう対応するかということです。

この課題は私に「学校とは何か」「学校の役割とは何か」「学校はなぜ行かなければいけないのか」という問いを投げかけてきました。これは、もっと突き詰めていけば、「教育とは何か」というところに行きつく、かなり本質的な課題であると思いました。「そもそも教育とは何か」「そもそも学校とは何か」という「そもそも論」、これは「こなす」ことがほとんどである学校現場では忘れられがちな大切な問いであり、この問いを私に与えてくれた子どもたちには本当に感謝しています。

私は、毎日子どもたちとともに学ぶ中で、その意味を問うべく、まず、大田堯さんの論考にあたってみました。ここで大きな学びがありました。「人間は一日中、小さな判断分別を積み重ねることによって生活していくほかありません。朝目覚まし時計のベルが鳴ったとき、予定どおり起きるべきかどうかという判断からその日が始まります。何を着、何を食べ、どういう交通手段で目的地に向かうか、いまこの道を渡るべきか、そうでないか、ことごとく、その時その時の判断によるのでして、休むことはほとんどありません。人が生きているとは選んでいることであると言ってもよいほどです。こうした数限りない小さな一つ一つの日常の判断に加えて、前に述べたような人生の大きな判断のそれぞれが、何らかの意味で、私たちの人格を創り

出していると言えます。」（大田１９９０）

おおまかに言えば「人が生きていくということは選択の連続である。どう選択するか、その選択能力をより良いものにする、それが教育の、学校の存在意義の一つではないか」というものでした。これは、私にとって、日々の教育活動を見直すきっかけとなりました。

そして、苫野一徳さんの考え方にも触れてみました。苫野さんは、学校の公教育の存在意義について、はっきりと言っていました。「その前に、『そもそも学校は何のためにあるのか？』についてここで話したいと思います。教育の構想や改革にあたっては、この“そもそも”を抜きにして議論することはできないからです。端的に言うと、学校は、すべての子どもたちが『自由』に、つまり『生きたいように生きられる』ための力を育むために存在しています。『自由』と言っても、それはわがまま放題を意味するわけではありません。というのも、『自分は自由だ、何をやるのも勝手だ』と言っていたら、それは他者の自由とぶつかることになり、争いになり、結局はお互いの自由を奪い合うことになってしまうことになるからです。そこで、私たちは、自らが『自由』に生きられるためには、他者の『自由』もまた認める必要があるということになります。これを『自由の相互承認』と言いますが、この『自由の相互承認』の感度を育むことこそ、公教育の最も重要な本質です。」（苫野２０２０）

かなり乱暴ですが、この「選択」と「自由の相互承認」を結び付けて考えると、私が毎日学校で行っている教育活動の目指していくものが、少しずつ見えてきたような気がしました。自由の相互承認の中で、自分のより良い人生を切り開いていくために、あるいは自分の生命の維持のために大なり小なり選択していく能力を一緒に学ぶ中で高める、そんなフレーズが浮かんできました。

そして、これを後押しするような学びがありました。それは、校内研究でお話をお伺いした鹿毛雅治さんの論考からでした。「これまでの日本の教育では、学習者自らが選んで学ぶという機会がほとんどなかった。何をどのように学ぶのかはすべて教師任せで、それが当たり前だった。自由に自分の選んだテーマを追究できるのはせいぜい夏休みの自由課題レポートくらいのものだろうか。彼らに選ぶ自由が与えられたとしても、無理やり選ばれているというような場合も少なくないのではなかろうか。（中略）自分にとって意味のある豊かな学びを子どもたち自らの意思で創造していけるような教育環境を整備することが教師の仕事である。子ども自身による自己決定を保証し、彼らがオリジン感覚を経験しながら学んでいくことを大切にすることがそこでは不可欠になる。」（鹿毛２００７）

「学校とは『学校でしか学べない豊かな学び』を成立させようとする場である。（中略）この授業で目指されていた体験的で創造的で協同的な学びは、一人ひとりユニークな存在である子どもたちの成長を支えようとしている学校という場であるからこそ成立する『学校でしか学べない豊かな学び』であった。学校の存在意義が問われている今だからこそ、『学校でしか学べない豊かな学び』に注目する必要があると私は考えている。われわれは、日常生活では意外と『豊かな学び』を体験していない。その場その場に対応するだけで、問題がなければ『思考停止』のまま時間が過ぎ去っていくことも多い。適応する術（how to の問いと答え）は尊重されても、ものごとの原理を探究すること（why の問いと答え）は敬遠されがちである。日常生活とは基本的に『結果オーライ』の世界なのだ。学校とは、日常生活ではなかなか成立しにくい豊かな学び—子どもたちと教師たちとが出会い、体験を通して気づいたり、感じたりした様々なことをともに振り返ることを通して互いに問いを生み出しながら探究を深めていくような学び—の成立を目指す、教育的意図が色濃く反映する特別な場であるということをわれわれは再認識する必要がある。」（鹿毛２００７）

南台に着任して１年目、校内研究の在り方や進め方を学ぶことができた。４月当初は、自分が今まで経験してきた研究の概念に縛られ、「目指す児童像はどんな姿か？」「研究仮説は立てないのか？」などが気になっていた。しかし、大事なのはそういうことではないし、そう簡単に仮説なんて立てることはできないと、この一年間を通して実感した。

～ラウンドスタディや学びカフェでの印象深いキーワード～

「授業は、子どもたちが自分の力で高みにのぼること。それを助けるのが教師。」

「学ぶ＝何か（考え方・人間としての生き方など）が変わること」

「のびしろを残した指導（児童自身があほしい！こうしたい！と思って取り組む）」

「学ぶ動機付けやきっかけづくり行うのが教師」

これらのキーワードは全て、先生方との対話の中で得た言葉である。色々な先生方と対話することで、新たな発見があったり、自分の考えに自信をもてたりと、自分自身の学びが深まり、校内研究に取り組む意欲が高まった。このことから、「やらされている」「やらねばならない」という受け身的な姿勢だと、その研修が終わると解放感しかないが、ラウンドスタディのような活動だと、自発的に学ぶ姿勢に自然となり、その時感じたことや学んだことが自分の中にしっかりと取り込まれると思った。

今年度の研究では、「主体的に学ぶ」とはどのような状態なのかについて考えた。先生方と話していく中で、自分自身の中で「主体的」という言葉の輪郭が徐々にはっきりしていくような気がした。

「主体的」とは、児童自身が「こんな自分になりたい」「これができるようになりたい」などのような、自己実現に向けて自ら学ぼうとする姿なのではないかと考えるようになった。児童が「こんな自分になりたい」「これができるようになりたい」と思うためには、そのモデルを示す必要があると思う。そのため、教師は児童の心が動くような場や環境を作りだしたり、発問や課題づくりをしたりすることが役割の一つとして大切だと改めて感じた。今年度は「もし自分が〇〇だったら」という課題を設定し、自分事として捉えるような課題の設定の工夫を行った。今年度はできなかったが、単元に入る前の動機づけとなる掲示などの仕掛けもあると、なおよいのではと思った。また、友達の姿を見て「これができるようになりたい」「自分もやってみたい」思うこともあるのではと考えた。そのため、友達の良さを見つけ、認められるような雰囲気や、安心して学べる環境を作る学級経営も子供たちの「主体性」を育むことに関連しているのではないかと考えた。

教師との、友達との、資料との対話から、子供たちが「こんな自分になりたい」「これができるようになりたい」と感じ、それを達成するためにまた教師や友達、資料との対話を行い、自分の成長や学びを深め、振り返る。そして次の学びに関連付けていくことが「主体的・対話的な深い学び」なのではないかと、ぼんやりではあるが考えた。

□児童主体の学び＝教師主体の学び

(1) 北フェス～蕨市立北小学校研究授業参観から学んだもの～

教師が校内研究そのもの（教師自体の学び）を楽しんでいる様子が、これまでの校内研究の在り方を覆すものであった。蕨北小での校内研究は、校内研究が決して、特別なものではなく、日常的教育活動の中にしっかりと組み込まれていた。加えて、そのことを教師たちが後ろ向きな思いからではなく、むしろ前向きに「日常の学び」として「学びを楽しんでいる」ことが私の心を動かすものであった。具体的な取り組みについて以下に記しておく。

・北カフェ

→お茶とお菓子と、心地よい音楽を聞きながら集まった先生たちで学ぶ。参加は任意。

休憩時間に行っていた。

・講師からの学び

→小島奈津子アナウンサー（蕨市教育委員）による「話し方講座」

・ICTの効果的活用

→Canvaの導入

例：ポスター「研究の小言」を教職員用トイレに掲示し、研究の日常化を促す。

(2) 研究授業（道徳）を行って～子供の学びから授業改善を行う～

研究授業を行って改めて感じることは、いかに「型」にはまった授業を行ってきたか、ということである。道徳では全員の声を共有することに意義があると思い込み、結果、表面的なつぶやきが聞かれただけの授業で終わってしまった。そのことを、授業後のRound Studyを通して、先生方が「子供の学びの姿」から様々な言葉をいただいたおかげで、気付くことができた。子供は、深い学びには至っていなかったのである。子供のつぶやきや発言を拾うことで、間接的であるからこそ、自身の授業の在り方を改める必要を感じることができた。また、私自身が真の子供の学びを見取ろうとはしていなかったことも分かった。これらのことから、私は早速授業改善を行った。掴んでほしいねらいはもちながらも、子供のつぶやきからときには、発問を予定していたものと変更し、グループでの話し合いの状況では、全体でさらに話を広げるなど子供の状況に応じて変更していった。勿論、そのことを通して、さらに改善が必要であったと感じたこともあるが、その繰り返しが、「子供の学びから授業をデザインすること」なのではないかと考えることができた。

(3) 講演からの学び

～校内研究担当として一年を振り返って～

講演では、以下のように伝えてくださった。

「当事者型授業研究」とは

- ・当該授業の学習者の具体的な「姿」への着目
- ・教師一人ひとり自律性の尊重
- ・教師集団の同僚性の構築

南台小の昨年度からの研究を振り返ると、上記の「当事者型授業研究」を南台小は築いてきたといえる。何より、校内研究担当として、校内研究が本当に楽しかった。そして、今も楽しい。その楽しさは、「南台小の先生方とあれこれと学びのおしゃべり（対話）が楽しい」からくるものである。恥ずかしながら、教員になってからというもの、「日々の業務に追われ」を言い訳にして、教育書たる本を何ら読んでこなかった。その自分が、家に帰って、ふと一息ついて、片手に本をもっているのである（いつもではないが）。それだけでも自分の変容であるといえる。これらの変容は、南台小の先生方にとっても顕著である。3月の年度末の時期に、高学年ブロックで、「授業研究を創る」の内容の一部について自然と話が始まったのである。話自体が楽しくて、これまでの授業研究（協議会や校内研究発表会）の在り方がいかに表面的なものであったかを、楽しく会話した。＝従来の授業研究の在り方を先生方の“姿勢”から脱却していることが分かった。

「学びを日常のものに。」そのことを、体現して教えてくださった、伊東先生には、感謝の思いでいっぱいである。伊東先生はいつもフラットに“横に並んで”研究について0の私を、導いてくださった。有難うございました。そして、引き続きどうぞ宜しくお願いします。来年度は、研究発表の年度ではあるが、決して「特別感」は出さずに、日常の延長線上という思いで、発表に向かいたい、そして、参観者が傍観者ではなく、「参加者」としてよりよい学びの時間となるよう、発表形態の工夫は行いたい。持続可能な校内研究をめざして。

- ・主体的な児童の学びについて（子供の視点から授業をみる）
- ・教師の主体的な学び（ラウンドスタディやグループでの振り返りを通して）
- ・これからの自身の授業デザインにどういかしていくか

研究授業と聞くと「この先生はどのように授業をするのか」「授業で工夫した点は何か」など、教師がどのように授業を行うのかについて考えていた。学びの主体は子供であって、子供がその時間何を学んだのか、どう変化したのかを視点に、授業を考えることを第一に考えることを学んだ。

「子供の学び＝事実」から授業について振り返るので、その学年・その単元によらず、自分事として一緒に考えることができた。また「いろいろ言われるからいやだな」というよくある研究授業を行った授業者の感情を抱くことはなかった。ラウンドスタディでは、メンバーが同じ時間話そうとできるよう配慮するため、経験のある先生からいろいろな話を聞くことができたし、自分の考えたことを伝えることができた。考えを伝えることは、ただ思うことよりも身につくと感じた。

児童主体の学びを実現するためには、まず子供の声を聴くことだと感じる。問題に対しての疑問、どうしたらうまくできるのかという意欲をきっかけに、深く考えたり、友達と協力して話し合ったりする。対話的で深い学びを実現するためにも、まずは子供の声を大切にしていきたいと思う。そして、どんな授業を行っていくのか、自分で学んでいくことが大切だと感じた。興味のある研究発表や勉強会に出ることもよい。一番は、職員室で一日の出来事や授業、子供のことについて語り合うことである。

□児童主体の学びを実現するためには、「児童が学びたいと思うこと」が出発点であると考えました。「知りたい」「できるようになりたい」それは何よりの主体性です。しかし、児童にとって興味があり、学びたいと思う内容と、教師が身に付けさせたい力が必ずしもイコールでないことがあります。それでも「やってみたい」と思わせたい。学びの価値、課題の内容と示し方、発問、手だて、導入の大切さ…これらを模索し続けました。また児童の多様な学びを受け止め、柔軟に舵を取る力も求められます。

研究授業や全員授業は、自分自身が「学びたい」と前のめりになることの連続でした。授業公開 week と、その後すぐの校内研でフィードバックをいただけること、とてもいい研究の手だてだと思いました。小グループでの学び合いで感じたのは、先生方の受容力の高さです。決して否定せず、何でも話しやすい安心・安全のなかでこそ、のびのびと学ぶことができます。これは大人にも子供にも大切なことです。

これからの授業デザインで取り組みたいのは、「シンプル イズ ベスト」。「これならできそう！」「これなら考えられそう！」と思わせられるよう、課題をシンプルに、授業を組み立てられるようにになりたいです。そのためにも、私自身が学び続け、学ぶことの楽しさを子供たちと一緒に味わえる教師を目指します。

子ども達が「楽しそう」「できそう」と思えると、「やってみたい」という気持ちが湧いてきて、主体的な学びにつながると思う。自分は、導入で工夫することが多かったが、公開授業を見たり、グループ協議をしたりする中で、展開時に子どもがやっていることをとりあげて、周りの子に「やってみたい」と思わせることで、45分間だれることなく学び続けることができることがわかった。

□全員公開授業&グループ協議というのは、大変な面もあるが、常々見たいと思っていた方の授業を見た上で狙いや思いを具体的な場面をとりあげて聞くことができるので、より理解が深まり、やった甲斐はあったと思えた。

自分の授業では、授業のふりかえりをノートに書いてもらい、今日の授業を経て子どもが何をやりたいと思っているのか、どうなりたいと思っているのかをくみ取って次の授業に活かすことをしている。子どもに合わせて柔軟に展開を変えながら決まったゴールを目指す授業ができるといいなと思う。

1 年間の研究を通して考えたことは、児童の主体性を引き出すためには、教師はどのような働きかけをすればよいのかということでした。全員授業の中で先生方の授業を参観することで、子供の姿から授業を捉えるようになりました。以前と授業の見方が変わったように思います。グループに分かれての研究では、先生方が何を大切に授業をしているのか、知ることができました。また1月に研究授業をやる機会をいただき、多くの先生に授業をみてもらうことができました。教師がどこまで教えるか、見守るかを今一度考える機会となりました。図工は活動が多く、自分では見切ることのできない子供の様子を教えてもらい、多くのフィードバックをもらえたことは私の財産になりました。

ラウンドスタディーも2年目となり経験年数や年齢がバラバラな集団で同じ授業をみて、率直な意見を言い合えることは、授業を深く理解することにつながると感じました。教師のあらを見つけるような協議会ではなく、子供の姿を通して授業を語り合えることは、同僚性の構築にも良い影響がでるのではないかと思います。

□体育科保健領域4年

- ・最後に学びを活かすため、アドバイスを書く際、教科書の内容のほかに事例を増やした。
- ・児童が似たような悩みに対して「私も」と共感的な感想を書いたのが印象に残った。
- ・身長伸びについて、各自でグラフを作らせて班員やクラス内での比較を行ったが、ただ個人差があること以外、特に傾向が分からず、見せ合うだけで終わってしまった。
- ・2時間目で、事前の周知等が間に合わず、保護者などの身近な大人にインタビューをすることができなかったが、『みなさんの体と、大人の人の体のちがいは?』という発問に対して児童が既存の知識で「男・女・どちらも」に起こる変化を分類することができていた。
- ・時期的にインフルエンザが流行しており、オンラインで参加する児童がいたため、google jam-board など、デジタルで教材を作成したほうが参加しやすく、授業後の共有が容易だったのではないかと考える。(google jam-board が2024に終了するようなので、代替できるアプリを知りたいです)